

第 57 回埼玉文芸賞（部門別選評）

※「」は生原稿・雑誌掲載作品、『』は単行本

【小説・戯曲部門】

第 57 回埼玉文芸賞の小説・戯曲部門は、3 年ぶりの埼玉文芸賞受賞作に丹路槇氏「ブレインドロップ」を選出、佳作に山川草也氏「縄のれん」を選出した。

今回の応募作品は 78 編。新たなテーマ、熟達度の高い作品を期待して選考にのぞんだ。文章力が一定の水準に達しているか、独創的な描写や比喩で描かれているか、物語に新鮮な驚きや説得力があるか、などを基本に慎重に協議した。

埼玉文芸賞「ブレインドロップ」は、アンドロイドや人工都市を描く。最新バージョンの量産型アンドロイドのテイは、同じ顔、躯体、性能のオオツに再会。身を寄せ、頬を摺り合わせ、手を繋ぎ、一体化して、深い情愛で支え励まし涙する。ヒトの儂さを羨み、朽ち果てることを美とするアンドロイドが現れ、分解物質「ブレインドロップ」を投与・飛散させた。機能が停止したアンドロイドたちは廃棄され、テイとオオツも劣化をたどる。都市もアンドロイドも消滅した空間で、オオツの記憶と繋がるテイ。

濃密な情愛は個体が相互に交わしたものでなく情報の同期によると描き込み、「ブレインドロップ」の真相をにおわせる表現手法に胆力をうかがわせる。入念な作品構成、人物像の描き分け、繊細な感情描写により、アンドロイドたちの思念に誘い込まれ、心揺さぶられる一作である。

佳作「縄のれん」。中堅企業の事務職社員鹿島竜男は、退職勧奨いわゆる「肩たたき」に遭い、56 歳で早期退職。ハローワークが斡旋する警備職などには納得できない。居酒屋チェーン店に採用され管理部長として社の経営向上に尽力するが、社長が新興宗教活動のために店を他社に売却すると竜男は退職。ハローワークで警備職も可であると告げる。

再就職への戸惑い、企業の内実、登場人物の心情が達者な筆力で表現され、軽やかな文体で描かれる家族の温かさ、快活さが心地よい。昨年度準賞の氏の「呆禅」とともに好感度の高い作品となった。新興宗教に打ち込む社長の人物像に、もうひと筆の描写がほしい。「ブレインドロップ」と埼玉文芸賞を競ったがわずかにおよびず、今後期待したい。

（山名美和子）

【文芸評論・エッセイ・伝記部門】

応募作 62 編中、最年長と最年少の作者による 2 作品を準賞に選んだ。共に文章を書くことで掘り起こされた記憶を一編の物語に織り上げた。堂々たる自伝形式で語った築根喜美江「長女に生まれて」と、前半に幼児の語り手を設定して構成した汐野ほの「パパのいない日」の 2 編である。

「長女に生まれて」は、川崎から東京都区部にかけての大空襲に遭った 12 歳の少女が、末妹を背負い歩いて埼玉の春日部へと疎開する。だがよくある疎開物語ではなかった。焼死した祖父と妹を焼け残った板材を燃やして茶毘に付し一人で遺骨を拾う。弟を背負った母が焼夷弾で火傷を負う。少女は避難先で家事一切を取り仕切り、まさに「12 歳の主婦」の物語となる。戦火止み東京で新制中学を卒業して疎開先に戻る。疎開先での末妹の病死をめぐる事実と本作執筆の十数年前に知った情報とを対置する方法で書き手を顕在化し、本作では珍しい現実への批判意識を露出する。こうした批評性は全体的には抑制されているが、働きながらの夜間高校卒業、母の乳癌入院と看護、末弟を連れての出勤など「12 歳の主婦」以来の生活は変わらず、祖父と妹二人の五十回忌法要および父母の看取りを担うに至るまでつづく。「長女に生まれて」醸成された自己意識が一人の自伝作者を誕生させたのである。林芙美子が「放浪記」で創造した 12 歳のボヘミアン少女とは逆だ。性別役割や親孝行と義務など文化的伝統の中を黙って生きた長女の社会学。この授賞によって今日のジェンダー論や自由論、家族社会学の論議にそっと差し出したい。

汐野作品は、前半、東日本大震災を「パパのいない日」として記憶する書き手が「ほいくえん」児の「ほの」を主人公として語り手「あたし」を設定し、ひらがな書きで綴る。保育園の卒園式と小学校入学式が間近い「あたし」にはその事情がよく理解できていなかったのだ。後半は漢字交じりの平叙文に変わり、震災から 10 年後、高校 2 年生になった「私」が語り手となる。あの日「パパ」は消防士で支援出動していたのである。なるほど、離れた土地の大災害をよく認識できない幼児の経験を再現する物語として構成することによって、成長した書き手自身の記憶と化すことができるわけだ。この書き手が「あたし」の語りを外から操作していたことは、ひらがな書きではあっても多くの長い修飾句や頻出する副詞の使用法、それに「フラッシュバック」の用語等から明らかである。卒園式にも入学式にも不在だったパパが 1 か月後にげっそり痩せて帰宅した記憶、コロナ禍で修学旅行先が仙台に変更され震災記念館を訪ねて父を想起した記憶、そして大学生になった〈今ここ〉での感慨などを語り、閉じられる。震災から 15 年経って父の定年退職が近い。親友の出し方も上手く才能を感じさせる。メタフィクションとして読むこともできる。

佳作 4 編。行木伸之「七十年目の「おかえり」」、倉林通乃「蛇紋の碑を建てた女 一大濱サイ子物語」、高多忠彦「いごこち」。尾滝妙子「秋の夕餉」。圧倒的に群れを抜く一編を埼玉文芸賞に選び出せず、残念である。

(佐藤 健一)

【児童文学部門】

応募総数は 42 編。準賞 2 編はいずれもクオリティが高く、埼玉文芸賞に推したい作品であった。

準賞 1 席は山根三穂「おふとんたろう」。眠くて起きられない主人公は、おふとんと一体化し、おふとんたろうになってしまう。母親はそんな息子を学校に運ぶのだが……。予想の斜め上をゆく楽しい展開。ラストはどんでん返しが続き、夢と現実の境目があやふやになる。このあやふや感がじつにいい。

準賞 2 席は芦屋和音「席替え」。今の中学生の姿が鮮やかに浮かぶ作品。ありきたりな設定や描写をことごとく排して描かれた世界が、リアリティをもって眼前に広がり、登場人物の息遣いが伝わってくる。学校という軋む環境のなかを、悩みながらも泳いでいく子どもたちにエールを贈りたくなる。

奨励賞は藤本美沙「大切な、人たち」。未来が見える少女が亡くなったあと、手紙が 3 通残されていた。そこには……。豊かなストーリーテリングの才能を感じさせる作品。

以下、佳作について。寄海一鹿「サイタマ・シントシン」は、龍神が川の氾濫を阻止するために人間界に働きかける物語。龍神と河川工事担当者のキャラクターがなんととってもいい。井上朝之「少年の星」は、昭和 30 年代を背景に、自然豊かな土地に転校してきた少年の成長を丹念に描いた物語。ミツキ・ミイコ「百十六段」は、祖母の早朝の日課であるお参りにつきそう少女の物語。大きなドラマがあるわけではないが、読ませる。山極尊子「あきらさま！おしり かしてください」は、新米のおむつが、この子のおしりで練習したいと訪ねてくるおはなし。オチも決まっている。白妙スイ「いちごキャンディのバレリーナ」は、かわいいファンタジー。バレエを習いたいけれど踏み出す勇気がない少女に、祖母が不思議なキャンディをくれる。ふじまる「民平の耳」は異色作。団扇のような大きな耳をもち、火になみなみならぬ関心をもつ少年の成長物語。強烈な印象を残した。

(森埜こみち)

【詩部門】

詩部門の応募は67点（前年度比15点の増）、その内訳は、詩集3冊、その他は原稿による応募で、そのうち奨励賞対象作品は10点であった。先ず3冊の詩集について協議し、次に、奨励賞を除く原稿作品の中から推薦作品を提示、意見を交わし、充分協議を尽くした上で、埼玉文芸賞は見送り、2作品に準賞を贈ることとした。準賞は、葉山美玖詩集『夜の間はよく晴れるでしょう』と、田中康士郎氏の原稿作品「風の配達する住所不明」に贈呈することを決定した。

葉山氏の詩集は、自らの生い立ち・家族との関わりを中心に、葛藤とそれを越え、仄かに光を孕む作品に至る過程を、独自の視点・表現による30編の詩で纏めた力量ある詩集であった。また田中氏の作品集は「きみ」あるいは「あなた」と呼ぶ不特定な対象に対し、慎ましくやかに、情趣ゆたかに愛をうたい、棘を持ち始めた現代社会への優しい呼びかけを10編の詩に纏めた作品群で、いずれも3選考委員一致の決定である。

佳作にはまず、能登半島地震を始め、甚大な被害をもたらした災害を材とする前半並びに、光の中に生まれる新たな命への慈しみを謳った後半の二部構成による新井良和氏の詩集『光の中へ』、次に、洗練された表現力で独自の世界観を表現した加藤雅水氏の原稿作品「触覚の星座図：身体と世界の反転点」を、続いて関根健人氏「ephemeral/documentary」を決定。この作品集は、文学的センスと表現力で幻惑的作品世界を構築されたが、英語表記の可否、その物語性に注視する意見もあった。十津氏「木漏れ日の人」は、自然体で開かれていく詩空間の豊穡が快く読み手に伝わる作品集であった。次に言葉遊びのセンスが魅力であった田幸樹枝氏「A blue sticky note on my blue note.」を、さらに戦争否定の視点をはじめ社会的視野を作品化する早蕨教一氏「記憶のプリズム」を加え、この6作品を佳作とした。

奨励賞には、若い感性で現実と想空間を重ねて詩を構成していた山本紗由美氏の作品集「私、ということ。」を、今後への期待を込めて決定した。第57回本賞詩部門は、全体として真摯な創作意欲に満ち、独自性と力量を感じる作品が多く、本賞の目的である埼玉文芸の興隆を感じる作品群であった。

（北岡 淳子）

【短歌部門】

短歌部門の準賞、中津川^{ろくさ}勲坐『埼玉は晴れ』は作者 70 代の歌を収める第二歌集。持ち前の科学的な視野を踏まえた好奇心と、細やかな心遣いや社会性をもったユーモアと、日常の中のさまざまな発見などが、豊かな言葉の世界を作り出す。年齢を重ねていながら、雪国の故郷と長年住み慣れた所沢を行き来し、短歌に自らの生の蓄積と現在の世界を刻む。楽しく、また感動的な歌集である。

図示しつつ時空のしくみ説きをへて妻と愉しむ過去へのワープ
友をりて人情ありてじよんのびな津南で飲む酒まことにうんめ
空爆で逝く児の画像ぼかさんとするかのやうに視力おとろふ

同じく準賞、大野博司「こんなにも遠い」50 首は、不思議な魅力を持つ詩的な作品である。やわらかな口語で綴られた歌は、日常の現実の中から生まれつつ、そこからふっと浮き出て、別の世界に読者を誘う。アンニュイと浮遊感をもちながら、作者の身体性と感性が、短歌の形と言葉に新しさと広がりを加えている。

雨よりもバスは遅れてやってきて思い浮かべる人のいる夜
生まれた町の言葉をつかうときいつもこころの中の鳥居をくぐる
靴の中の小石を気にしながら歩くこんなにも遠い春までの道

奨励賞、佐々木琴美「今日も」50 首は高校生の作品。素直な表現で、繰り返される日々の中での自分を見つめて歌としている。さらに世界を広げての躍進が期待される。

下駄箱の扉開ければ今日もまたガラスの靴履き生徒^{エス}Sになる
何でもない話する母見て思う最後にハグをしたのはいつかと

佳作は6作。緒形樹「空があんまり青いので」、白藤巳玲「光を掬う」、富永英瞳「やがてはムービー」、福田望「夢を象る」、岩崎雄大「顔のないわたし」、茂木敏江「自由な暮らし」。さまざまな世代の個性と指向が、50 首に縦横に展開する。

(内藤 明)

【俳句部門】

第 57 回俳句部門には、前年と同じ 89 編の応募があり、特に高校生世代対象の奨励賞には 8 編の応募が寄せられた。

今回は句集での応募は 2 名と（例年は 7～8 名）近年では最も少なく、例年とは少し趣が違っていた。他の部門でも単行本は少ないと聞くが、その理由は不明である。

田口紅子、久下晴美、尾堤輝義が選にあたったが、例年よりやや低調な感じは免れず、3 人が埼玉文芸賞に推薦する作品は見当たらず、準賞 2 名、佳作 6 名、奨励賞 1 名を推すことになった。

準賞には、原稿応募の「水笑ふ」木村佑氏、単行本の『ときに鳥』山本董氏の作品に決定した。

噴水となるとき水の笑ひけり 木村佑

ときに鳥おほむね虚空朴の花 山本董

次に佳作の 6 名を決定した。

江原正子 「ひとり居の」より

片恋の方が幸せ冬薔薇

渡辺みほ 「つくづくし」より

菜の花や喪服で降りる里の駅

泉義勝 『つぶやきの』より

つぶやきのつぶやきとなる秋の声

伊藤恭子 「だらだら坂」より

涅槃図を見てゐてまぶた重くなる

くら茂 「雨宿り」より

正座まだ崩せぬ話水羊羹

鳥山由貴子 「ブロッコロロマネスコ」より

春愁の螺階ブロッコロロマネスコ

奨励賞には 2 つの高校から応募があった。

黒田紗矢 「日常図鑑」

青田風影ひとつある気球かな

なお、表記に新旧の仮名遣いが混在するのには気を遣いたいとの選者評もあった。

(尾堤 輝義)

【川柳部門】

本年度の川柳部門は 43 名の方からのご応募をいただいた。大勢の方々が、この一年間のご自身の川柳との格闘を、この様なかたちで結集させ、差し出して下さったことに大きな喜びを感じる。それを踏まえて、謹んで拝読した。

総体的な印象としては、少々、申し上げにくいことではあるが、描かれてある事象や思いの内容は伝わりくるものの、単にそれで終わってしまっている、といった風情の叙述が散見されたように感じる。「表現」という視座から拝するに、「そうなんだ」とか、「そうですか」で終わってしまう造形は、底が浅くなってしまうことになり、少々、もったいなく感じられてならない。記されてある事柄の背後に立ち上がりくる何ものかの存在、その有無が、造形の巧拙の鍵を握るものであると、私は考えるのであるが、いかがであろうか。加えて、本賞の応募は一句単体によるものではなく、50 句一章によるものであるという点にも、ご留意いただけたらと願う。章としての発信は、選び抜いた御句を並べればよい、というものではない。それぞれの御句をどのように配するかが、その造形に大きな差異を生じさせることとなるのである。佳句同士であっても、この句の隣にこの句が配されると、共倒れになってしまう、といった事態が起こり得る。反対に、隣り合わせることによって、共にその情趣が弥増す、といった場合も生じ得る。言うまでもないことであるが、私たちが表現者として心がけるべきは後者の展開であろう。川上三太郎氏が断じて下さったとおりの、「句は我が子」なのである。どうか、大切に取り扱いいただければと希う。

準賞 1 席に頂いた山田和子氏の「生きる」を始め、準賞 2 席そして佳作に頂いたみなさんの御句の中の、決してセツメイに終わってはいない叙述の数々が差し出して下さっている《今、ここ、私》に瞠目する。いい句をありがとう、と、心から。

(高鶴 礼子)

《第 57 回埼玉文芸賞選考委員》

小説・戯曲部門	中村 邦生	三田 完	山名美和子
文芸評論・エッセイ・伝記部門	加藤有希子	佐藤 健一	杉浦 晋
児童文学部門	金治 直美	櫻沢恵美子	森埜こみち
詩部門	川中子義勝	北岡 淳子	野村喜和夫
短歌部門	沖 ななも	外塚 喬	内藤 明
俳句部門	尾堤 輝義	久下 晴美	田口 紅子
川柳部門	酒井 青二	相良 敬泉	高鶴 礼子

《事務局より》

第 57 回埼玉文芸賞贈呈式は、3 月 21 日（土）桶川市民ホール 1 階 プチホール（さいたま文学館併設）にて開催いたします。選考委員による部門別選評を贈呈式内での発表に代えて、書面にてお届けいたします。さいたま文学館HPでもご覧いただけます。